

本気の夏、100回目

夢の甲子園の舞台へ



なかしま たいせい 中嶋 大晴 (高木)

東海大学付属熊本星翔高等学校3年
 平成13年1月12日生。左投げ左打ち。小1で城山クラブに入り、野球を始める。6年のとき、チームのキャプテンとして県大会で優勝、九州大会に出場する。中学校では、クラブチームの上益城ボーイズに加入。3年生のときは、春の全国大会出場を果たす。高校は、東海大学付属熊本星翔高等学校の野球部に加入。予選を勝ち抜き、熊本の頂点、甲子園出場を勝ち取った東海大星翔ナインの一人、中嶋さんのその背景に迫る—

第100回全国高等学校野球選手権記念大会が8月5日から21日までの16日間にわたり、阪神甲子園球場で行われました。今年のキャッチフレーズは「本気の夏、100回目」。平成時代最後の大会となりました。

熊本県からは、東海大学付属熊本星翔高等学校が県大会を制し、県代表として35年ぶり2回目、甲子園への切符を手に入れました。御船町からは、高木出身の中嶋大晴さん(高3)が2番・センターで出場。甲子園、熊本、御船を誇がせました。

東海大星翔の強さ

1年生の時から、3年生が引退したあとの新チームで、スターティングメンバーとして試合に出場。ポジションは、外野手(センター)。守備を得意とし、「目を切って、打球を追う」といった打球の落下地点まで予測し、最速でかけつけることができるのが強みだ。打順は2番を任せられており、野仲義高監督は「中嶋さんは、相手チームを嫌がらせる選手。常に考えて行動している」と話す。バッティングでは、パワーだけではなく、頭を使ったプレーができ、攻撃の起爆剤となるプレイヤーだ。



打席で構える中嶋さん(球磨工業戦・準決勝)



得意の守備で外野を守る

高校では、ほぼ毎日練習をしている。平日は16時すぎに練習が始まり、20時に終わる。そこからさらに、ほとんどの部員が自主練習をし、さらなる高みを目指す。土日も同様に学校が終わったあと、4時間から7時間の練習を行い、その後は、自主練習に励む。毎日練習することによって、「おれたちは毎日しているんだ」という気持ちになり、自信にもつながる。「何でもやるならとことんやる」と話す中嶋さん。練習は、量だけでなく、質も追求している。そうすることで結果もついてくることを確信した。

練習中から「甲子園」という言葉を自分たちの口から出すように野仲監督から言われていた。少しでもミスをすると「そんなんじゃない甲子園行けんぞ」とチームメイト同士で励まし合い、甲子園を意識させていた。

県大会での激闘

35年ぶり2回目の甲子園へ出場を果たした東海大星翔高校だったが、県大会では、激闘の試合だった。

星翔高校は、「守備からリズムをつくり、攻撃に流れを持っていくチーム」と語る中嶋さん。1回戦を5回コールドで勝ち上がり、2回戦は九州学院戦。県大会前までの公式戦での対戦結果は、3戦全敗。苦しい戦いだったが、味方のホームランなどで4対0で九州学院を下した。中嶋さんはスタメンの中ではなかったが、その勝利が中嶋さんたち星翔ナインのさらなる自信へとつながり、試合を勝ち進むにつれて、だんだんと自分の持ち味が出てきた。

決勝の相手は、強豪の熊本工業高校。先制点を取ったが、同点になり、逆転された。しかし、中嶋さんたちに焦りはなかった。チームスローガンとして掲げる「執念」という言葉で、どんな時でもあきらめない姿勢で立ち向かい、味方のスリーランホームランで逆転に成功した。最後のバッターをショートゴロで抑えた瞬間、今までの思いが込み上げてきた。気づいたらセンターからマウンドまで全力疾走していた。仲間たちと抱き合い、勝利の喜びを分かち合った。

「甲子園」という舞台

高校球児なら誰もが憧れる大舞台「甲子園」。

1回戦の相手は大垣日大高(岐阜)。初回から中嶋さんがライト前へ快音を響かせ、チーム初安打となり、先制点につながる場面を演出。先制点を取るも、4



甲子園での打席 勝負の1球!

回裏に逆転を許したが、東海大星翔高校のあきらめない気持ち「執念」で、5回表に中嶋さんがレフト前ヒットを打ち、チャンスが来た。しかし、全国の強豪が集まる甲子園では、逆転かなわず、1回戦敗退となった。中嶋さんの甲子園での成績は、3打数2安打1四球。「チームは負けたが、自分の持ち味は発揮できた」と語り、甲子園をあとにした。

「感謝」そして「夢」へ

野球を始めて12年。「野球の楽しさや面白さを教えてくれた城山クラブ、野球の奥深さと厳しさを教えてくれた上益城ボーイズに感謝です。今まで野球を何不自由なくできたのは、家族のおかげです。自分が頑張るなら応援してくれる家族がいたからこそここまで来れた。「ありがとう」と伝えたい」と語った。

そんな中嶋さんの夢は、社会人野球でプレーをすること。これからも大好きな野球に携わる仕事がしたいと語るその熱い思いからは、目が離せない。